

世界児童画展 特別賞に2人

ひなた保育園 団体賞

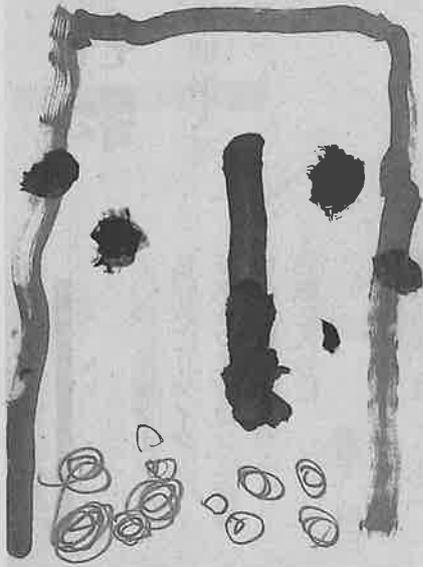
鈴木愛菜ちゃん、草野旭飛君

第55回世界児童画展(美育文化協会主催、読売新聞社など後援)の入賞者が決まり、県内からは2人が特別賞に輝いた。海老名市の「ひなた保育園」の鈴木愛菜ちゃん(4)は文部科学大臣賞に選ばれ、同園は都道府県団体賞に。また、横浜市中区のアート教室「キッズアート・アップ」に通う小学1年生、草野旭飛君(7)は美育文化協会賞を受賞した。

(村尾潤)



受賞を喜ぶ愛菜ちゃん(中央)ら
園児と吉川園長(海老名市で)

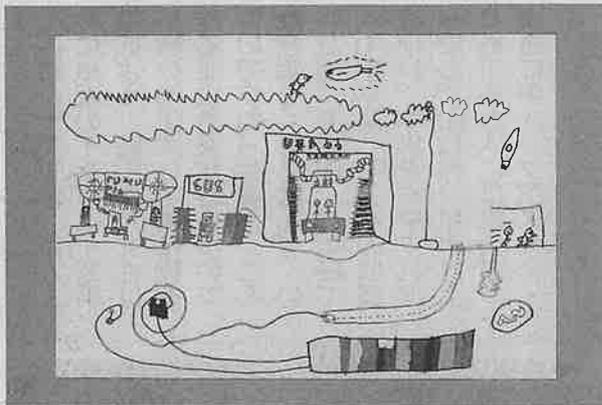


「ゾウさんリンゴ食べるかな」
文部科学大臣賞 鈴木愛菜ちゃん

タブレット端末でお絵かきを楽しむ草野旭飛君(横浜市で)



「洗車ステーション」
美育文化協会賞 草野旭飛君



鈴木愛菜ちゃんの作品「ゾウさんリンゴ食べるかな」は、大判の画用紙いっぱい、ゾウの大きな体を表現。園が用意した88色の絵の具から選んだ鮮やかな赤紫色で、力強く輪郭を描いた。愛菜ちゃんは「リンゴが好き。ゾウさんにも食べさせたい」とほほえんだ。受賞を喜ぶ家族には「また動物園に行きたい」とお願しているという。

ひなた保育園の吉川孝道園長(68)は「斬新な色遣いや、いびつな線。3歳頃の子どもが描く絵には、型に

はまらない魅力があまりま

す」と語る。絵や工芸を通じた情操教育に力を入れる同園は、裏山での自然観察など創作につながる体験を大切にしているといい、今回は愛菜ちゃんを含め5人が入賞・入選した。

草野旭飛君の「洗車ステーション」は、家族で時々訪れる身近な施設を題材にした。「最初は怖かったけど、好きな場所になった」といい、独自の空想を交えた楽しい作品になっている。目をひくのは、絵の右下

にあるカラフルな四角形。洗車ステーションの地下に隠された「宝の入れ物」だといい、その上の横穴をモグラが掘り進み、アリの行列が続く。日頃から、タブレット端末で絵を描きながら、思いついたストーリーを話してくれるという。

アート教室に通い始めたのは昨秋。友だちの話を聞いて「ボクも行きたい」と言い出した。母親の知永さん(31)は「絵を楽しんでくればと思っただけで、まさか賞をいただくなんて」と驚いていた。